

## Faculty of Humanities Learning Commons Casa in Practice — Café and Auditory Environment —

ESAKA Yukiko (representative)

KOMATSU Masafumi

TAMURA Yuka

This is a report on the second semester activities of the Faculty of Humanities Learning Commons Casa, established in 2018. In April 2018, the basement area of the Seifukan building was designated as the Learning Commons area, and activity was commenced with the aim of providing mutual learning support among students in the Faculty of Humanities. Subsequently reforms became necessary in both the activities contents and method.

A reform of the spatial and activities contents was undertaken in second semester. The first move was in the area of staff recruitment. In first semester, the main focus had been on peer support, and there had been only limited time to begin activities, so these had been centered around fourth year students recommended by the teaching staff. However, Casa was recognized by only a section of the student cohort. This led to extending the recruitment to include second and third year students in second semester.

In terms of its operation, student opinion was strongly in favor of providing a space where students would feel free to drop in, so it was decided to set it up in drop-in cafe style. The cafe was operated by student staff and tea, coffee and snacks were provided free of charge. A microwave oven and electric kettle were also provided for use at lunchtime. Casa also used a Christmas gathering and other events to raise awareness of its activities, which was effective in resulting in an improvement in student use rate.

On the other hand, some expressed the wish for a quiet space for study, so Casa's operating times were divided between the cafe time and a quiet time set aside for study purposes. An experiment in auditory environmental conditions, known as "Project for Improving Auditory Environment", was also conducted to improve the learning environment. Opinions were canvassed in relation to both writing and reading experiences, and in both cases it was found that students preferred some form of sound. It has become clear that there is a need for further consideration of what form of sound (music) would be most appropriate.

In March 2019 a report of these experiments was made by two students and a member of the teaching staff at The 2019 Spring meeting of the Acoustical society of Japan of held at The University of Electro-Communications 電気通信大学 .

Based on the activities of first and second semesters, we have identified further reforms and developments for the coming academic year.

## 人文学部ラーニングコモンズ Casa の実践 ——カフェと音環境を中心に——

恵阪友紀子 ESAKA Yukiko  
小松 正史 KOMATSU Masafumi  
田村 有香 TAMURA Yuka

### 《目次》

1. はじめに (田村)
2. 2018年度後期の当初の活動方針 (恵阪)
3. スタッフ学生の募集 (恵阪)
  - 3.1 募集方法
  - 3.2 募集規定の設定
    - 3.2.1 応募要項
  - 3.3 募集説明会と応募状況
    - 3.3.1 応募用紙
  - 3.4 面談と採用
  - 3.5 スタッフミーティング
  - 3.6 Casa Twitter の運用
  - 3.7 スタッフに対するスキルアップ講習
  - 3.8 フィールドスタディーズ (3年生プログラム) ブログ執筆による広報活動
4. CAFÉ Casa (田村)
  - 4.1 カフェオープンのいきさつ
  - 4.2 カフェの実績
  - 4.3 クリスマスパーティー
  - 4.4 カフェの評価
5. 音環境実験 (小松)
  - 5.1 音環境実験のねらい
  - 5.2 音環境実験の詳細

- 5.2.1 目的
- 5.2.2 方法
- 5.3 実験結果
  - 5.3.1 読む作業
  - 5.3.2 書く作業
  - 5.3.3 自由記述
- 5.4 学会での発表成果と今後に向けて
- 6. 2018年度 Casa の総括 (惠阪)
- 7. 人文学部ラーニングcommonsの展望 (田村)
- 8. 終わりに (田村)

## 1. はじめに

本稿は、紀要52号での報告に続き、2018年度の後期に人文学部ラーニングcommons Casaにおける取組を報告するものである。

清風館地下スペースを人文学部のラーニングcommonsと位置づけ、学生たちが人文学部での学びをお互いにサポートする目的で活動を始めたのは2018年の4月である。それまで倉庫のような状態であった部屋は4年生の尽力で見違えるように居住性のよいスペースになった。前期には主として4年生がスタッフとして活動し、相談体制の構築、フィールドスタディーズの相談会などを通して人文学部の活性化に資する活動を展開した。

2018年の前期と後期では、場所のコンセプトに修正を試みた。4年生が卒論で忙しくなることも考慮し、主たるスタッフを3年生と2年生にシフトした。それに伴い、スタッフ学生の募集と運営体制も変更することとした。具体的には、特に学習相談や生活相談などの意図がなくても気が向けば立ち寄れるカフェのようなスペースづくりと、静かに勉強する時間とカフェを時間帯で分けて多目的スペースとして利用することなどが、事業の中心となった。

前期にはどちらかというと、ピア・サポートの意味合いが強い場所づくりを想定してスタッフ募集や活動内容の検討を行ってきたが、後期には人文学部生の「居場所」づくりに資する活動内容となった。それは最初から意図したものではなかったが、試行錯誤した半年間の成果を振り返ったところ、結果的にそう位置付けられると気づかされた。

学校が、児童生徒にとって自己の存在を実感できる精神的に安心していることのできる場所、すなわち「心の居場所」としての役割を果たす必要があることは、1992年の学校不適応対策調査研究協力者会議（文部科学省）で指摘されている<sup>1</sup>。その報告がきっかけで、以降「心の

居場所」が学術的に論じられることとなった。文部科学省の報告書は義務教育を想定してのものであったが、教育機関において「居場所」が重要であることは、全ての年代についての数多くの研究によって明らかになっている。「居場所」とは単なる物理的な場所のことではなく、一般的には概ね快感情を伴う場所、時間、人間関係等を指して用いられている<sup>2</sup>。さらに、不登校が生じないように学校づくりにおいて、「自分の存在を認識されていると感じることができるか、かつ精神的な充実感を得られる心の居場所となっているか」を問い直すことの重要性が指摘されている<sup>3</sup>。

本稿では2018年度後期のCasaスペースにおける様々なトライアルの成果や効果の検証を行い、「居場所」に関する先行研究の知見も参考にしながら、この事業の可能性と展望をまとめることとする。また次年度に向けた取り組みの方向性も示す。

なお、本プロジェクトについては2018年度学長指定課題研究（学内のコミュニケーションを促進するプロジェクト）による研究助成を得ている。

## 2. 2018年度後期の当初の活動方針

前章でも触れたが、2018年度前期のCasaスタッフの活動は、アルバイトとして清風館地下スペースに学生が常駐し、カメラなどの機材貸出、パソコンやプリンタの管理、レポート作成などの学習支援を行った。しかし、他の在学生への周知不足などさまざまな事情から思うようには運営できなかった。

そこで、スタッフとして培った企画力や文章作成能力を就職活動の際にも活かすことを目指して、後期はスタッフの学生が主体となってイベントを企画し、イベントごとに教員がアドバイザーとして支援、イベント運営金を補助する方針を立てた。

イベントの企画に当たっては、まずイベントの企画書と必要な予算書を作成し、事後に報告書と決算書を提出させることとした。企画・運営・予算に問題が無かった場合、運営費の一部を補助するというものである。

《清風地下を利用したイベント応募要項》		
人文学部支援チーム Casa 教員		
◆経費の補助を希望する場合		
・申し込みは締め切り日（およそ3週間前）までに Casa の担当教員に、申請書・予算書・実施案内チラシ（案）を添えて提出すること		
※ 書類は相談窓口にお問い合わせください		
※ 申し込みから実施決定までは1週間程度かかります		
・申請書・予算書は規定の記入例に従ってもれなく記入すること		
・実施内容については、人文学部学生間や他学部との交流を促進する内容であること		
・企画が採用された場合は、実施案内のチラシを以下の場所に張り出し、速やかに人文学部学生に周知すること（Casa のフェイスブックでも告知します）		
※ 少なくとも2週間前までにチラシが張り出されない場合、採用を取り消すことがある		
チラシ掲示場所		
・清風館・春秋館・流溪館・本館・食堂 以上の指定のスペース		
・その他 人文学部学生の集まる場所		
・20枚程度を掲示すること（なお、事後は速やかに撤収すること）		
・企画実施後（複数日に渡る場合は最終日から）は1週間以内に報告書と決算書を提出すること（報告書・決算書がなければ、経費は支給されないで気をつけること）		
・申請書・予算書を教員で協議し、予算の一部を補助できる場合がある		
・必要経費は、代表者が一括して管理すること（補助は事後精算）		
・入場料や料金が発生する企画は不可		
・ゲストを呼ぶ場合などは申請書の提出前に相談すること		
◆経費がかからない場合		
・個人での利用には申請は必要ない（いつでも自由に利用可能）		
・二人以上のグループ利用の場合はスペース利用管理台帳に記入して予約すること		
※ 必要な机の数を記入すること（1～6台、1台4～6人掛）		
・一週間前からの予約が可能（企画イベント・教員主催イベントが優先）		
《応募相談窓口》		
・Casa について詳しく知りたい場合は、以下のアドレスにお問い合わせください		
その際、必ず件名に「Casa について」と書いてください		
田村有香	kakuno@kyoto-seika.ac.jp	R115
小松正史	masafumi@kyoto-seika.ac.jp	R230
恵坂友紀子	yesaka@kyoto-seika.ac.jp	R235

図1：応募要項

募集要項・企画書・予算書はそれぞれの図1～5のように作成し、企画書等の作成には教員が手助けをすることとした。

《教員記入欄》受付者 \_\_\_\_\_ 受付日 / 振用(可・否)  
イベントNo.( \_\_\_\_\_ )

清風地下を利用したイベント(申請書)  
申込日 年 月 日

企画代表者  
学籍番号 \_\_\_\_\_  
名 前 \_\_\_\_\_  
メールアドレス(PCに限る) \_\_\_\_\_

イベント名 \_\_\_\_\_  
目的 \_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

実施内容(実施日・時間なども詳しく書くこと)  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

来場者見込み数 ( \_\_\_\_\_ ) 人  
企画構成者(学籍番号と名前 代表者に◎、副代表者に○をつける)  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

計 \_\_\_\_\_ 人

図2：企画申請書

《教員記入欄》受付者 \_\_\_\_\_ 受付日 / 振用(可・否)  
イベントNo.( \_\_\_\_\_ )

清風地下を利用したイベント(予算書)  
申込日 年 月 日

企画代表者  
学籍番号 \_\_\_\_\_  
名 前 \_\_\_\_\_  
メールアドレス(PCに限る) \_\_\_\_\_

イベント名 \_\_\_\_\_

《自分たちで準備するもの》  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

《Casaの備品で使用したいもの》  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

《予算》※書ききれない場合は別紙を添付すること

購入するもの	個数	合計金額
購入品名		
支出合計		円

《教員使用欄》  
補助金額 \_\_\_\_\_ x 円 = \_\_\_\_\_ 円  
費目( \_\_\_\_\_ )

図3：予算書

《教員記入欄》受付者 \_\_\_\_\_ 受付日 / \_\_\_\_\_  
イベントNo.( \_\_\_\_\_ )

清風地下を利用したイベント(報告書)  
報告日 年 月 日  
※ イベント終了後、一週間以内に提出すること

企画代表者  
学籍番号 \_\_\_\_\_  
名 前 \_\_\_\_\_  
メールアドレス(PCに限る) \_\_\_\_\_

イベント名 \_\_\_\_\_

企画構成者(代表者に◎、副代表者に○をつける)  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

イベント参加人数 ( \_\_\_\_\_ ) 人 ※スタッフを除く  
(内訳) 1年生 人 2年生 人 3年生 人 4年生 人  
その他( \_\_\_\_\_ )

実施日時 \_\_\_\_\_  
実施後の振り返り(感想・気付いた点・反省など)  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

図4：企画報告書

《教員記入欄》受付者 \_\_\_\_\_ 受付日 / \_\_\_\_\_  
イベントNo.( \_\_\_\_\_ )

清風地下を利用したイベント(決算書)  
報告日 年 月 日  
※ イベント終了後、一週間以内に提出すること

企画代表者  
学籍番号 \_\_\_\_\_  
名 前 \_\_\_\_\_  
メールアドレス(PCに限る) \_\_\_\_\_

イベント名 \_\_\_\_\_

《決算》※書ききれない場合は別紙を添付すること

購入品名	個数	合計金額
支出合計		円

《教員使用欄》  
補助金額 \_\_\_\_\_ x 円 = \_\_\_\_\_ 円  
費目( \_\_\_\_\_ )

図5：決算書

以上のようなイベントが企画できる、企画したいと思う学生を集めたという意図のもと、学生スタッフの募集を行った。

### 3. スタッフ学生の募集

2018年度前期のCasaのスタッフ募集に当たっては、ピア・サポートなどの側面から教員の推薦によって学生を集めた。しかし、広く公募にしなかったこと、学生全体への周知が不十分であったことから、活動内容が学生にも教員にも十分には理解されなかったことが大きな反省点であった。

そのため、後期は学生全体に公募をかけ、個人面談で意思の確認を行った上でスタッフに登録する形に変更した。

以下、募集から活動開始までの経緯をまとめる。

#### 3.1 募集方法

スタッフ募集の案内は、2018年9月25日に行った学年毎の後期履修ガイダンスで2、3年生に対して募集チラシを配布し、口頭での主旨説明と応募の呼びかけを行った。なお、当初は学習面での支援も考えていたため、スタッフの登録は2年生以上とし、1年生には募集を行わなかった。案内配布から活動までの流れは以下の通りである。

9月25日 履修ガイダンス（2、3年生）に募集チラシの配布。

10月1～5日 スタッフ募集説明会

10月19日 応募締切

10月末 応募用紙集計

10月31日 第1回学生ミーティング（活動開始）

11月7～21日 個人面談

なお、当初は応募集計後、個人面談を経てスタッフ登録を実施する予定だったが、応募数及び応募した学生の状況から全員を登録することを決め、活動開始後に個人面談を行うことにした。詳細については後述する。

#### 3.2 募集規定の設定

学生スタッフの募集に当たっては、人文学部の学生交流を図るイベントの企画・学習支援などが可能な学生を集めたいという希望から、次のような規定を設けて募集をした。

募集要項に成績基準を設けた理由は、自分の学業を顧みずにイベント運営にのめり込んでし

まう学生が少なからずいるからである。さまざまな課外活動について積極的に関わりたい学生がいることは本学の特徴であり、良い面ではある。一方で、学業を疎かにしては本末転倒であることから、今回は最低限の基準を設けることとした。なお、この基準は、本学の大学祭実行委員募集要項と同じである。

また、学生にとってもスタッフとして活動することのメリットがわかりやすいように明示し、活動支援としてスキルアップ講座が無料で受講できることなども掲載した。

以下、募集要項を引用しておく。

### 3.2.1 募集要項 (Casa スタッフ募集)

#### ◆募集要項 (表面)

##### 《Casa 募集案内》

Casa を知っていますか。清風館地下を活性化させるための学生スタッフです。

レポートの書き方、清風館地下に眠るカメラなどの機材、これらを活用して、イベントを企画し、実行しています。

前期には新入生歓迎イベント、フィールドワーク展&相談会を企画実行しました。

もちろん、学生が集まれるようにカフェを企画したり、映画の上映会をしたり、なんでもできます。何かしたいという人は是非、説明会に来てください。

##### 《Casa の業務》

- ・カメラなどの機材・備品の貸し出し・管理
- ・ミーティングへの参加
- ・業務に関わる講習会への参加
- ・イベントの企画・実行 (内容によっては経費の補助が受けられます)

##### 《Casa スタッフの義務》

- ・フィールドワーク展、卒業展、オープンキャンパスなどの手伝い  
※アルバイト代が支給されます

##### 《Casa に入るメリット》

- ・スキルアップ講座が無料で受けられる (在学中1回限り)。
  - Illustrator/Photoshop 講座 ● web デザイナー講座
  - DTP 入門講座 (In Design) などのうちから一つ
- ・イベントの企画ができる (サポートあり)
- ・学内アルバイトの情報が得られやすい
- ・学年を越えた交流がしやすい



《スタッフ応募の流れ》

- ・人文学部支援チーム Casa 説明会

日時 10月1日～5日 12:20～12:40 場所 清風館地下

10/1, 4 恵阪 10/2 小松 10/3, 5 田村

※日程が合わない場合は、相談窓口ご連絡

- ・応募締め切り 10月19日 19時

清風館地下に設置のポストに申込書を投函

- ・個人面談（日時は個別に連絡）

- ・選考結果発表 10月末（予定）

※結果は個人アドレスに送ります。

◆募集要項（裏面）

《こんな人を求めています！》

- ・自分たちが主体となってイベントをしてみたい人
- ・パソコンやカメラを使って表現したい人
- ・人と関わるのが好きな人
- ・文章や絵をかくのが好きな人
- ・お祭りがすき
- ・なにかやってみたい人 など

《募集対象・人数》

本学人文学部2、3年生 若干名（各学年）

《応募方法》

- ・10月1～5日の説明会に出席し、応募用紙をもらい、必要事項を記入する  
 ※全日程の都合が悪い場合は相談窓口にお問い合わせのこと
- ・10月19日19時までに応募用紙を清風館地下のポストに投函

《成績基準》以下のいずれかに該当する場合は応募できません

- ・2018年度後期に休学または休学予定の者
- ・前年度までに標準的な単位数（1年あたり31単位）が修得できていない者  
 ※新入生を除く
- ・2018年度に留年状態にある者
- ・そのほか学修状況や学生生活に問題が認められる者

《応募相談窓口》

- ・ Casa について詳しく知りたい場合は、以下のアドレスに問い合わせてください
- その際、必ず件名に「Casa について」と書いてください
- (担当者のメールアドレスを連絡先として記載したが、ここでは省略する)

### 3.3 募集説明会と応募状況

10月1日から5日までの5日間に行った募集説明会には、のべ8人(実質6人)の参加があった。後期開始直後であったことなどから想定したよりはやや少ない人数であった。

説明会参加学生の内訳は次の通りである。メールでの問い合わせにも応じていたが、問い合わせはなかった。

- 10月1日 0人
- 10月2日 3人
- 10月3日 2人(うち1人が友人の分として応募用紙3枚を持ち帰る)
- 10月4日 1人(3日の来訪者の内の1人)
- 10月5日 2人(うち1人は3~4日の来訪者)

説明会では、募集要項に記載した内容の説明とイベントの募集の方法などを説明し、説明を聞いた学生に対してスタッフ応募用紙を配布した。説明会に参加した学生は全員、応募用紙を持ち帰った。

募集締め切りまでの応募した学生は8名で、3年生7名、2年生1名であった。

#### 3.3.1 応募用紙

スタッフ応募用紙は図6に挙げたように作成した。

応募した学生の動機は次のようなものであった。

〈申し込み動機〉

- ・何かやってみたかった
- ・先生から誘われた
- ・面白そうなことができるとおもった

〈スタッフとしてやりたいこと〉

- ・学年を越えた交流
- ・みんなが集まれる場所を作る

《教員記入欄》受付者 \_\_\_\_\_ 受付 年 月 日 採用(可・否)  
 受付 No. ( \_\_\_\_\_ )

人文学部支援チーム Casa スタッフ申込書

申込日 \_\_\_\_\_ 年 月 日

学籍番号 \_\_\_\_\_

名 前 \_\_\_\_\_

連絡用アドレス \_\_\_\_\_

※個人情報保護はスタッフ採用およびその後の連絡にのみ使用します  
(申し込み動機)

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

《Casa スタッフとしてやりたいこと》

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

《自己PR》

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

《使えるソフト》使用できるソフトまたはそのレベルに○を付けてください

- ・Word ( 文字入力のみ 書式設定・表の作成 差し込み文書など高度な設定 )
- ・Excel ( 入力のみ 簡単な書式設定など 関数計算など高度な設定 )
- ・PowerPoint 〇 Illustrator 〇 Photoshop 〇 その他 \_\_\_\_\_

※教員使用欄 ① 受付 No. は ( 四桁—〇〇〇 ) 記入 ( 例 ) (2018—001)  
 ② 可否に○を付け、可の場合は、学年ごとにファイリングする

図6：申請書

- ・勉強できるスペースの確保
- ・みんなで楽しめるイベント

具体的に何がしたいという明確な動機は見えなかったものの、学生の居場所づくりや人文学部全体としてまとめられる交流イベントをしたいという意見が目立った。主体的に何かを企画したいというよりは、面白そうな企画と一緒に盛り上げたいという希望である。

その一方で、自分が何かを企画して実施するよりも、落ち着いて静かに学習できるスペースを確保するために応募した学生もいた。

### 3.4 面談と採用

スタッフに応募した学生がそれほど多くはなかったこと、また応募の基準、動機にも問題がなかったことなどから全員をスタッフとして採用することとした。面談には時間がかかるため、少しでも早く活動を開始することが重要と判断したという側面もある。

面談に先立って右の面談シートを配布し、学生に記入させたものを回収した。

学生が「スタッフとしてやってみたいこと」に挙げたのは次のような内容である。

- ・みんなの集まれる場所を作る
- ・音楽イベントなどを企画してみたい
- ・静かに勉強できるスペースを確保したい

また、「どうすれば実行できるか、どのように実施するか」については、白紙または「これから考える」が大半であった。

この面談シートをもとに、担当教員3人で分担して面談し、学生の希望などの聞き取りを行った。

学生との面談の結果、何かをしたいと思って応募したものの、具体的にこんなことがしたいという強い希望はあまり見えず、漠然と何かやってみたいという意見であった。

### 3.5 スタッフミーティング

面談シートの内容をもとに、当初予定していたイベント応募型では運営が困難であると判断

CASA スタッフ面談シート

面談日 月 日 ( )

学 生 \_\_\_\_\_ (学籍番号)

面談者 \_\_\_\_\_

・スタッフとしてやってみたいこと

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

・どうすれば実行できるか、どのように実施するか

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

※以下の項目は○を付けてください

・全体ミーティングの日程の希望

水曜日昼休み      木曜日昼休み      その他 (                      )

・第1回目のミーティング希望日

10/31 (水) 昼休み      11/1 (木) 昼休み      どちらも不可

・FP屋の準備スタッフ (アルバイト代支給)

11月2日 13:00~15:00 (延長の場合 16:00まで)

アルバイト可能      不可能

・その他、本人の希望など

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

図7：面談シート

し、先にスタッフミーティングを行って、いくつかの運営方針やイベントなどの提案を教員主導で行うこととした。

スタッフミーティングは前期と同じく、毎週水曜日の昼休みに行うこととした。

第1回目のミーティングでは、学生の代表・書記・会計を選出し、今後の活動方針を話し合った。

改めて学生に何がしたいのかを尋ねたが、何かのイベントをしたいという意見と、勉強できるスペースの確保をしたいという意見しか出なかった。

そこで、前期に提案のあったカフェの運営を提案したところ、大半の学生からの賛同が得られたため、後期は清風館地下スペースをカフェとして運営することとした。カフェについては、「4. CAFÉ Casa」に詳述する。

また、静かに学習したいという意見も強かったことから、自由に活動できる時間帯と静かに学習する時間帯（サイレントタイム）とに分け、入室した学生にわかりやすいようにサイレントタイムの時間帯を張り出すことにした。

その後、毎週行ったスタッフミーティングでは活動の情報共有を行った。水曜日には大学に来られない学生もいたため、LINEのグループを作成し、ミーティングの内容はLINEで共有した。

### 3.6 Casa Twitter の運用

Casaの活動内容を多くの学生に終始するため、学生が比較的よく使うというTwitterでの情報発信を行うこととした。Twitterの管理には担当の学生が行い、定期的な情報発信を目指した。

実際にはそれほど多くの更新はできなかったが、カフェの案内、クリスマスパーティーなどのイベント告知を行い、活動内容の周知を図った。

### 3.7 スタッフに対するスキルアップ講習

スタッフに対しては、応募用紙でも明記したように、スキルアップ講習の受講をサポートした。これは、Casaホームページやチラシ、ポスターなどでの情報発信を見越したことでもあり、なおかつ、人文学部独自のフィールドプログラム成果展示や卒業論文の展示に際して、高度なスキルを持っている学生がいることは学部にとっても非常に有益なことである、という側面もあった。具体的には、キャリア支援チームで行っているAdobeソフトやwebデザインなどのe-learningのシステムを利用し、その受講料を助成金からまかなうという方法をとった。2018年度は4年生が8名、3年生が4名、2年生が4名受講した。内容は、Illustrator/Photoshop

講座が9名、web デザイナー講座が3名、DTP 入門講座が4名である。

受講前にはモチベーションが高かった学生達だが、受講可能期間が1年間なので、その成果をいつどのような形で確認したり使用したりすればよいのか、教員も見極めがつかなかったことが反省点である。使い方を知っている学生を増やすだけでなく、実際に何らかの業務を発生させて、そのスキルをますます磨いていくような働きかけが必要であった。これは2019年度に向けた課題として残る部分である。

### 3.8 フィールドスタディーズのブログ執筆による広報活動

人文学部には、3年次のフィールドスタディーズ（半年間大学から離れて勉強する）という重要なカリキュラムがある。これは存分に学部のアピールにつながる内容であるため、広報チームとタイアップして、帰国後の学生にブログ記事の執筆を依頼し、それを大学公式ホームページの高校生向けのページに掲載することとなった。そのブログ記事の執筆は、Casaの3年生スタッフ4名が担当してくれた。記事執筆にあたっては教員や広報担当職員からの指導が数回ずつあった。学生たちには自分たちの取り組みを客観的に評価しなおし、なおかつ効果的に発信する良い経験となり、同時に人文学部にとっては貴重な広報資料となった。

## 4. CAFÉ Casa

### 4.1 カフェオープンのいきさつ

後期に始動した新たな体制でのスタッフミーティングにおいて、初期の主な話題は、カフェの運営についてであった。

2018年度前期には、スタッフが常駐していてもそこへ相談に来る下級生がほとんどおらず、主には4年生が集う場所として利用されていた。それはそれで意味のあることではあったが、下級生から4年生が集まっていると部屋自体に入りにくいというような意見があったことや、学習相談や生活相談に対するニーズが想定ほど大きくなかったことを受け、カフェという形式であれば、特に学年や目的にこだわることなく、人文学部生全員が気軽に利用できるのではないかとの見通しのもとに、軌道修正を行った。



図8：カフェオープン告知ポスター

また、前期に行っていた機材の貸し出しや、生活相談・学習相談の目的での訪問等については、カフェのスタッフが必要に応じて対応することとし、前期からの事業の継続についても担保できるようにした。

まずは部屋をカフェにも使える仕様にレイアウト変更し、カフェに必要な食器やそれを置く棚、洗い物をするための道具などを買いそろえた。季節的に秋から冬に向かっていたので、提供するドリンクはコーヒーメーカーを利用したドリップコーヒー、電気ポットの湯を利用できる紅茶や日本茶などのメニューに限定した。また、教員のカンパを募り、簡単な茶菓子なども常時机上に用意することにした。

Casa メンバーのうちカフェ運営に興味のある学生がカフェスタッフとなり、自分たちの授業のない空き時間の情報を出し合って、無理のない範囲でカフェのオープン時間を決定した。またカフェスタッフの代表は3年生のKという学生に決まり、相談事についてはLINEのグループの中でも行われた。

2018年11月14日のカフェのオープンについてはチラシやTwitterで告知し、清風館の目立つところには大きいポスターも掲示した。カフェのチラシのデザインは3年生の学生スタッフAによるものである。また、1年生に対しては初年次演習を通して全員にチラシを配布した。

カフェのオープン日にはTwitterで見たという学生数名の来訪があった。チラシを見て来たという申告はなかったので、たとえ学内であってもSNSによる発信が重要であることが結論付けられた。

## 4.2 カフェの実績

カフェは、スタッフの調整により、毎週水曜日の12:30から14:20までと、金曜日12:30から16:00までという週2回のオープンに落ち着いた。後期期間中、合計16回開催された。オープン前には担当の学生がコーヒーを用意し、ポットで湯を沸かし、茶菓子などをかごに入れて机にセットする。これらは全て、来客には無料で提供された。終了時には使用済みのカップをスタッフがまとめて洗い、すべての電源を落として片付ける。

教員からはこだわりのコーヒー豆や茶葉の提供などを受けた。時には学生スタッフが帰省した先や旅行先のお土産を持ち帰り、カフェで提供されることもあった。

また、カフェがオープンしていない時でも、Casaに



図9：カフェ開店時間告知ポスター

備えている電子レンジ、電気ポット、コーヒーメーカーなどは学生が自由に使えることとした。カフェスタッフがいない時間帯に利用する場合に自由に飲めるコーヒーや茶葉なども限定して置いておき、準備や後片付けは各自が行うよう張り紙などでルールを伝えた。昼には買ってきた弁当を電子レンジで温めて昼食をとっている学生をよく見かけた。学生が自由に使える電子レンジはこれまで、食堂の1階と2階にしか設置されていなかったのが、重宝されたようだ。

カフェの最終日、2019年1月18日には、カフェ代表の学生Kの発案により、スタッフの打ち上げとしてたこ焼きパーティーを行い、お互いの労をねぎらいあった。

### 4.3 クリスマスパティー

2018年12月25日にクリスマスパーティーを行うこととなった。狙いは、1年生と上級生と教員をつなぐこと、CAFÉ Casaの活動をアピールすること、であった。

12月上旬の初年次演習で1年生全員と初年次演習担当教員に告知し、ポスターの掲示も行った。当日は教員6名、1年生約15名、上級生約15名の参加があった。フードとしては鍋とたこ焼き、クリスマスケーキを用意し、その他ドリンクも提供した。鍋とたこ焼きについては、当日の授業の合間にスタッフが仕込みをした。材料の買い出しなどは学生が行い、費用は教員によるカンパで賄った。また、クリスマスらしく室内の装飾にも工夫した。

小松正史氏は電子ピアノでクリスマスソングやオリジナル曲を生演奏し、会場は終始和やかな雰囲気であった。

当日は年内最終の初年次演習があり、その終了後すぐの時間帯であったためもう少し1年生が多く参加してくれると見込んでいたが、想定より参加者が少なかった。クリスマスなので他の予定を入れている学生も多かったようだ。告知は12月の初めに全員に対して行っていたので、告知不足や告知の遅れによって参加者が少なかったわけではなく、日程設定に無理があったものと考えられる。

また、クリスマスパーティーを発案し準備の中心的役割を担っていた3年生のほとんどが当日参加できないという運営上の問題もあった。その結果、よく段取りを把握していない下級生が当日の準備をまかされるという危うい状況が発生した。これも日程設定の不都合によるものである。次年度以降にもクリスマスパーティーを行うなら、日程調整はもっと慎重に行わなけ



図10：クリスマスパーティー告知ポスター

ればならないし、広報を徹底するのみではなく、スタッフも一定の責任感をもってイベントの実施にあたる必要があることが改めて確認された。



写真1：クリスマスパーティー 1



写真2：クリスマスパーティー 2



写真3：クリスマスパーティー 3



写真4：クリスマスパーティー 4

#### 4.4 カフェの評価

カフェ開催時には多い時で10名ほどの訪問があった。スタッフが友人を誘ってお茶を楽しむ姿も見られた。平均すると、カフェオープン日1回当たり4～5名程度の来場であろう。場所の広さからすると十分な集客とは言えないが、人文学部生の移動の導線上にあるわけではない清風館地下にわざわざ来る学生がいただけでも、トライアルとしては意味のある事であり、一定のニーズが確認された。

カフェスタッフからは、「カフェの準備と片付けの作業が大変だった」「準備をしても来客がないと作ったコーヒーを捨てることがある」「冷蔵庫があれば冷たい飲み物も提供できる」などの意見があった。また運営体制の反省としては、カフェスタッフの全員が集まれるミーティング時間が確保できなかったことで、連絡がLINEでのやりとりになり、情報共有が十分にできなかったことが挙げられる。

また、教員にも折に触れて利用を呼び掛けたが、教員の研究室がある流溪館と清風館は起伏や距離があって行き来しづらく、教員によるカフェの利用が少なかった。学生同士のコミュニ



ケーションはもちろん重要であるが、適度に教員が関わることでさらに学部内のコミュニケーションが促進されることもあり、次年度に向けての改善が望まれる部分である。

## 5. 音環境実験

### 5.1 音環境実験のねらい

本章では、人文学部ラーニングcommons Casa の施設資源である清風館地下スペースのミーティングルームの空間づくりの質的向上を音から図るための「音環境改良プロジェクト」について報告する。

ラーニングcommonsの運営で重要なことは、学生が自主的に問題解決を行い、自分の知見を加えて発信するための、学習活動全般を支援する空間づくりを実現することである。具体的には、学生同士が作業しやすくリピートしたがる雰囲気を提供する空間づくりを目指す。

当プロジェクトの始まりは、2018年前期に「清風館地下の音環境を変えて空間の雰囲気をよくしたい」とCasaの学生スタッフが発言したことがきっかけだった。そこで、本プロジェクトに参加を希望する学生を募りミーティングを重ねた。最終的に、参加学生は計3名であった。

清風館地下は、大学構成員であれば誰もが使えるオープンスペースである。そのため、会話や人の動作音などがしばしば発生する。さらに40dB程度の空調音の発生をはじめ、コンクリートのグレー色が空間の雰囲気を損ねている。

そうした空間の質を改良するために、会話を伴わない自習時間中の作業効率を高めることを目的に、背景音の変化に伴う利用者の心理変化を音環境実験によって計測することを試みた。具体的には、清風館地下の現場で簡易的な音環境の心理実験を行った。

### 5.2 音環境実験の詳細

#### 5.2.1 目的

背景に存在する音の種類によって作業効率がどのように変化するかを、SD法を用いた比較実験と自由記述で明らかにする。SD法とは、意味微分法(Semantic differential Method)のことで、「明るい—暗い」のように対の言葉を使った尺度を用意し、ある音(感覚)の印象が、各尺度の



写真5：実験概観

なかでどこにあるかを判断させる方法である。人それぞれが感じている「主観的印象」を数値化し、比較させる手法で、あまり深く考えず、直観で記入する。

こうした心理実験は、他の音を遮断・統制（ヘッドフォン装着）した実験室がよく用いられる。今回は対象現場の空間づくりを直接の目的としているため、あえて清風館地下現場のリアルな作業環境をそのまま使う形態で心理実験を行った。

### 5.2.2 方法

#### (1) 使用音源

空間に付加する音源は、②川音と、③音楽を用いた。①再生音なしの条件は、現場の環境音をそのまま用いるため、付加音源はなかった。②は作業空間では 40dB 程度の空調音が発生しているため、そのマスキング効果を確認するための無意味音（前意識過程で処理されやすい音）として用い、10 分間連続して再生した。③は環境音楽の効果を確認するため、作業を妨げない程度の音量で、穏やかなピアノ曲を用いた。5 分の曲を 2 回リピートして 10 分間連続して再生した。

#### (2) 協力者及び調査時期

本学人文学部の学生・教員・学外教員を含めた全 14 名を対象とした。実験協力者の多くが清風館地下空間をよく利用している。実験日は 2018 年 11 月 21 日と、12 月 3 日である。(写真 5：実験概観)

#### (3) 手続き

実験協力者が日常の学習作業（読書などの文章読解＝読む作業：情報の input、または文章作成＝書く作業：情報の output）を行ってもらい、①再生音なし、② 45dB 程度の川音、③ 45dB 程度の音楽（小松正史作曲のピアノソロ曲:Kyoto Ambience）の 3 条件で実験を行った。音刺激は、音楽再生プレーヤ（iPad）と 2 本のスピーカ（YAMAHA MS101 II）を使って再生した。3 条件が終了する毎に、SD 法（7 段階尺度の 11 表現語対）による印象評定と、作業

■清風館地下空間の「音環境」に関するアンケートのお問い合わせ■

●あなたが行った作業は何ですか？（一つだけ） □読書（文章読解） □文章作成

1-1 作業を行ったときの印象を、7つの尺度から1つだけ選びOをつけてください。  
あまり深く考えず第一印象で判断してください。全ての尺度に対して回答をお願いします。

	非	か	や	ど	や	か	非
				ち			
				ら			
		常		な		常	
				も			
				な			
				に			
				り			
				1			
				2			
				3			
				4			
				5			
				6			
				7			
つ	ま	ら	な	い			楽
な	か	な	か	終	わ	ら	な
い							
作	業	が	は	か	ど	ら	な
重	苦	し	い				軽
早	く	終	わ	り	た	い	
眼	く	な	る				目
落	ち	込	む				ウ
気	分	が	の	ら	な		気
や	る	気	が	出	な		や
散	漫	に	な	る			集
う	る	さ	い				静
							か
							な

1-2 作業を行ったときの印象について、何か気づいた点があれば、自由にお書き下さい。

図 11：実験に使用した質問票

中の印象についての自由記述を行わせた。(図 11：実験に使用した質問票)

(4) 分析方法

印象評定結果を 3 条件毎に平均し、3 条件の比較をプロファイルにまとめた。さらに、「①再生音なし - ②川音」と、「①再生音なし - ③環境音楽」の各グループ間において、t 検定（一対の標本による平均の t 検定：p 値は両側）を行った。自由記述においては、条件ごとに特徴のある文章をまとめた。

5.3 実験結果

「読み」「書き」ともに共通した評価傾向がみられた。「①音なし→②川音→③音楽」の順に、徐々にポジティブな心理状態になりやすいことが認められた(図 12：全体の評価傾向)。②川音に関しては、読みの作業時に集中力が散漫になる状態がみられた。各音刺激を付加することで、「重苦しい→軽やかな」の変化が現れた。また、各音刺激を付加することで、「静かな→うるさい」の変化が現れた。現場に何らかの音が付加されると、場の静寂が破られるといったリスクが発生する。全体的には、刺激音の付加によってポジティブな心理状態（楽しい、やる気が出るなど）が向上する傾向がみられた。

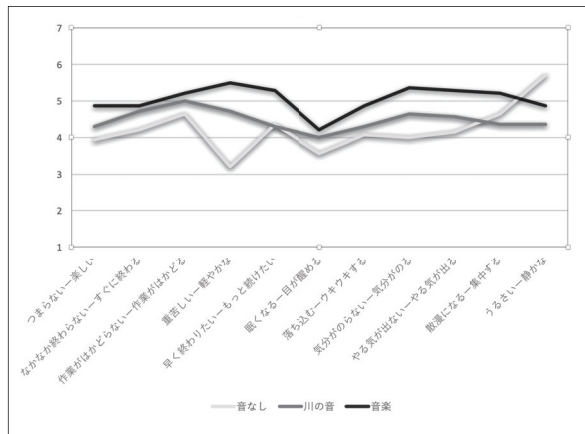


図 12：全体の評価傾向

5.3.1 読む作業

「重苦しい→軽やかな」と「眠くなる→目が醒める」の 2 項目に、有意差がみられた(図 13：読む作業の評価傾向)。書く作業に比べてポジティ

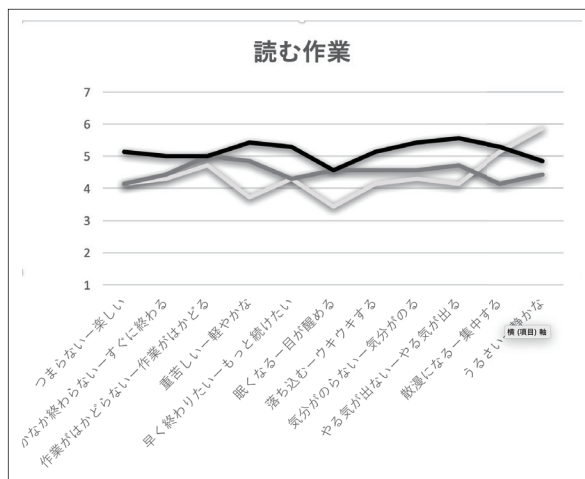


図 13：読む作業の評価傾向

ぶな変化は少ないが、「静かな→うるさい」以外の評価に変化がみられる。また川音の付加によって、「集中する→散漫になる」「静かな→うるさい」といったネガティブな傾向になることが示された。

### 5.3.2 書く作業

読む作業に比べて、書く作業の方が音源の付加によって作業の心理状態がポジティブに高まる傾向が顕著であった（図14：書く作業の評価傾向）。表現語対については、「楽しい」「すぐに終わる」「軽やかな」「ウキウキする」「気分がのる」の方向に有意差が確認された。とりわけ③音楽を付加する条件で、その傾向が強く現れた。

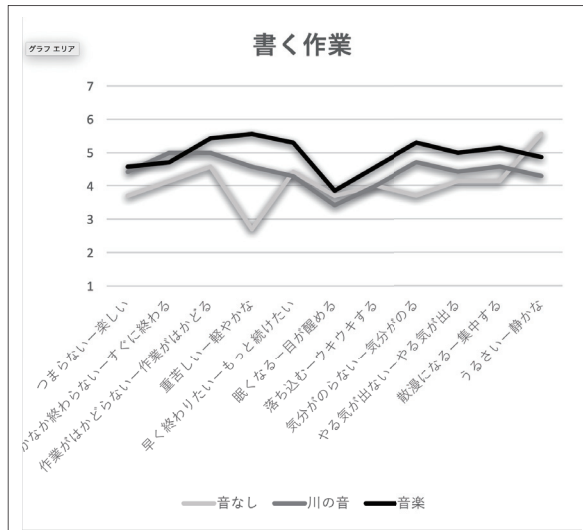


図14：書く作業の評価傾向

### 5.3.3 自由記述

①音なしでは、「自分のキーボードを打つ音がひびき、他人を気にする」

「人が動くと、何をしているのか気になる」「せきを止めるのに苦労する」のように、自分あるいは他者が発する音が気になり、作業に集中しづらい状態が生まれる傾向が確かめられた。

②川音では、「トイレを連想する」「(11-12月の) 季節柄、寒く感じた」「川音に意識が向けられ集中しづらい」といったネガティブな意見が多く、場の文脈に合わない環境音を流すと空間の調和が壊れ、逆効果である可能性が考えられる。

③音楽では、「ピアノの音が集中の切れない高さで演奏され、作業に集中しやすい」「ふだん音楽をかけることが多いので、違和感なくやれた」のように、思考を邪魔しない静かなピアノ曲を選曲した効果が現れた。ただ、「音楽の鳴り始めに集中力が散漫になる」「曲のテンポと読みの速度にギャップがあり、集中がやや抑制された」のように、音楽構造を敏感に感じ取りやすい人は曲に注意を向けるため、作業効率が低下する可能性がある。

3条件で作業のしやすい順として、上位から「③音楽→①無音→②川音」の組み合わせを挙げる人が半数おり、人工的に再生する川音は周囲の暗騒音をマスキングせず、作業効率を下げる可能性が高いことが確認された。

不特定多数のいる公共空間に音楽を導入することはリスクが高い。「静かすぎると作業に集

中できないが、音を流せば集中できるというわけでもないと感じた」「自然音や日常生活音についてはほとんど影響はないが、楽曲は選曲によって違うように感じた」との回答があり、音楽導入の際にはデリケートな配慮が求められる。

すべての人にマッチングする音楽の選択は困難である。その都度の最適解を判断しつつ、場所に見合う音楽を選ぶ姿勢が重要である。とはいえ、凡庸な音楽の選択を行っても、空間の質的向上にはつながらないため、使用場所・用途に応じた音楽制作を継続して行うことが、今後望まれるであろう。

#### 5.4 学会での発表成果と今後に向けて

本研究の成果は、2019年3月に電気通信大学で行われた「日本音響学会 2019年春季研究発表会」で発表した（写真6：発表会場）。発表タイトルは「学習支援空間の音環境改良プロジェクト」で発表者は筆者（小松正史）に加え、当プロジェクトに関わった3年生の学生2名の合計3名であった。

全体の概要と実験方法・結果を小松が発表し、その後、学生の視点から本プロジェクトを共同で行った見解と感想を、それぞれの学生が述べた。学生が述べたコメントとしては、①実験に参加した感想と、②清風館地下に望ましい音や音楽について、である。

①については、「初めて心理実験を行ったが、聞こえる音の種類によって、作業効率が大きく変わることを実感した」「実験環境がいつもの空間と違う印象で、多少戸惑いがあった」「各自の音の好みがあるので、選曲が難しそう」とのコメントがあった。

②については、「今回は学習作業中心の実験であったが、会話をするときやイベントを行うときの選曲は、もっとテンポの速い明るい曲がいいのではないか」「音楽があることで、却って作業が滞ることも考えられる。選曲には細心の注意を注ぐ必要がある」「音楽を使うのもよいが、空間を使用する時間ゾーニングをしっかりと、作業時には会話をしないなどの配慮を図ることも重要である」とのコメントがあった。

会場の参加者からもいくつかのコメントがあった。「他の教育現場でも応用できる内容のプロジェクトである」「選曲の基準をさらに増やすとよいと感じる」「継続されることを願う」といった、ポジティブな意見があり、参加学生たちも大いに刺激を受けたようである。



写真6：発表会場

今後、当プロジェクトを継続するに当たっては、学生たちの主体的な運営を続けることが奏功につながるものと考えられる。具体的には、空間の使用用途に応じた選曲をいくつか行い、どの曲がどのような影響を及ぼすのかを、地道に実践していくことが望まれる。

人文学部ラーニングcommons Casa の空間は2019年度から清風館地下を移動し、現在、流溪館のR101とR119を使用している。ゾーニングの観点からも、2部屋に分かれることは好ましい。自由な会話が行える動的な空間と、図書館としての働きをもつ静的な空間に分け、それぞれに相応しい音環境を創造することで、学習支援空間の空間づくりが質的に向上するのではないか。

## 6. 2018年度 Casa の総括

2018年度後期の Casa の主な活動は、当初計画していたイベント応募型からCAFÉ Casa の運営に方向転換を行った。学生の話を書くといろいろなイベントをしたいという意見はあったが、具体的な企画を立てるまでの十分な力がまだなかったという点が大きな要因であった。また、カフェの運営に注力し、同時並行でさまざまなイベントを企画できる余裕がなかったということもある。

さらには担当教員3人だけでは十分なサポートができなかったことも大きな問題点であった。イベントを実施したい学生と、勉強場所の確保を目的とした学生との間の温度差も埋め切れなかったことも、教員の力不足を痛感する点であった。学生のやりたいことを教員がサポートする体制づくりを目指したが、その前の段階のサポートからが必要である。

まずは学生たちが、自分たちのやりたいことが何なのかを明確にできる力をつけることが重要である。例えば、新入生歓迎会は例年行っているので、企画や準備、当日の運営は学生だけで企画運営が可能である。

カフェの運営についても提案自体は教員からのものだったが、カフェをすると決めた後の運営（机の配置、必要な備品の調達、方針など）は教員の手助けは必要なく、学生が主体的に行った。

しかし、学年を超えた学生の交流をしたいという希望があっても、具体的に何をすればいいのか、どんな企画をすれば楽しめるのかのアイデアはなかなか出てこない。

最初は学生の希望を丁寧に聞き取り、自分たちのやりたいことをどうすれば実行できるのかを誘導するし、手助けをする必要があるだろう。

実行力は十分にあるので、企画力をどのように身に付けられるようにするのが今後の課題である。

## 7. 人文学部ラーニングcommonsの展望

谷淵（2015）は、大学生の居場所感と学校適応感の関連について、「大学生の学校適応感については、空きコマや休み時間を過ごす場所で情緒的に安定していただける程度が強い関連を示す」ことを見出している。一方、「他人の存在に配慮しなくてもよいといった空きコマ場面における他者からの自由や、好きなように振舞えるという行動の自由は適応感の一部にネガティブに関連」することも明らかになっている。すなわち、「大学での適応を考える上では、『居場所』において他者とのつながりを感じられることが重要」であるという。以上の結果を踏まえ、谷淵（2015）では、居場所づくりによって大学生の学校への適応を高める方法として、「空きコマや休み時間を過ごす場所として、落ち着いた気持ちで過ごせる空間をつくること、さらに、学生が独立して過ごすのではなく緩やかに他者と交流できる空間を作ること」と、「1年生や2年生の居場所感を高めることが有効である」ことが指摘されている<sup>4</sup>。

このような視点から Casa をとらえると、大学生の居場所の1つとして十分に機能し得る条件をそなえていることがわかる。休退学率を下げるという大学全体の取り組みに対しても、学生の学校適応感を上げることは重要であると考えられる。そのためには Casa のような取り組みを継続し、発展させていくことは効果的である。

ピア・サポートや居場所づくりについては、大学等において学生相談を担う部署で取り組まれている事例も多い。別所（2018）では、学生相談の分野における個別カウンセリング以外の活動の1つとして、ランチアワー、ティーアワー等、学生相談の担当者と学生と一緒にランチをとったりお茶を飲んだりしながらコミュニケーションを図る取り組みが紹介されている<sup>5</sup>。また、独立行政法人日本学生支援機構（2017）によれば、「学生支援において特に重視すべき領域」として「ピア・サポート」を挙げた大学は57%、「学生の居場所づくり」を挙げた大学は126%あった<sup>6</sup>。本学でも学生相談室が「ていーあわー」を毎月3回程度開催している。これらのことから、今後の Casa の活動については、学内の学生相談部門との何らかの提携や情報交換なども必要になってくることが明らかである。

## 8. 終わりに

2019年度には引き続き、人文学部の学生の居場所を確保し、人文学部の学生・教員のコミュニケーションを促進する場所として、このラーニングcommonsのプロジェクトを行っていく。ただし、清風館地下スペースは他学部の人員増などの影響で利用できなくなったため、場所を

流溪館 R101 (スチューデントcommons) と R119 (人文ライブラリ) とに移動することとなった。流溪館はほとんどの人文学部教員の研究室がある建物であり、若干スペースは狭くなったものの、人文学部の学生及び教員がより積極的に利用できる場所が確保できることとなったことは大きなメリットである。

さらに、ここまで一緒にプロジェクトを進めてきた小松正史氏がポピュラーカルチャー学部へ異動したことを受け、新たに学内起業も視野に入れたうえで服部静枝氏の協力と、人文ライブラリとの有機的な結合を視野に入れて司書課程の教員である佐々木美緒氏、木川田明美氏の協力によって2019年度のプロジェクトを進めていくことになっている。

なお、2019年度の学長指定課題研究にも採択された。引き続き研究助成を受けながら、人文学部のcommonsのあり方について研究活動を続け、人文学部生及び教員のコミュニケーションの活性化を図っていきたい。

## 注

- 1 文部科学省、「『登校拒否（不登校）問題について』－児童生徒の『心の居場所』づくりを目指して－」、1992年、[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/06042105/001/001.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/06042105/001/001.htm) 2019.8.30 最終アクセス
- 2 石本雄真、「居場所概念の普及およびその研究と課題」、神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要第3巻第1号、2009年、p.93-p.100
- 3 文部科学省、「不登校児童生徒への支援に関する最終報告」、2016年、[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/08/01/1374856\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/08/01/1374856_2.pdf) 2019.8.31 最終アクセス
- 4 谷淵真也、「大学生の居場所感と学校適応感の関連」、比治山大学紀要、第22号、2015年、p.65-p.73
- 5 別所崇、「学生相談における居場所づくり（2）－ランチアワーの取り組み－」、奈良佐保短期大学研究紀要、第26号、2018年
- 6 独立行政法人日本学生支援機構、「大学等における学生支援の取り組み状況に関する調査（平成29年度）結果報告」、2017年、[https://www.jasso.go.jp/about/statistics/torikumi\\_chosa/\\_icsFiles/afieldfile/2017/02/14/h27torikumi\\_chosa.pdf](https://www.jasso.go.jp/about/statistics/torikumi_chosa/_icsFiles/afieldfile/2017/02/14/h27torikumi_chosa.pdf) 2019.8.31 最終アクセス

## 引用参考文献

石本雄真、「居場所概念の普及およびその研究と課題」、神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要第3巻第1号、2009年、p.93-p.100

小松正史、磯優里菜、北村真梨奈、三田村慶郎「学習支援空間の音環境改良プロジェクトー京都精華



大学人文学部ラーニング・コモンズでの実践」日本音響学会 2019 年春季研究発表会、2019 年 3 月  
谷測真也、「大学生の居場所感と学校適応感の関連」、比治山大学紀要、第 22 号、2015 年、p.65-p.73  
独立行政法人日本学生支援機構、「大学等における学生支援の取り組み状況に関する調査(平成 29 年度)  
結果報告」、2017 年、[https://www.jasso.go.jp/about/statistics/torikumi\\_chosa/\\_icsFiles/afiedfile/  
2017/02/14/h27torikumi\\_chosa.pdf](https://www.jasso.go.jp/about/statistics/torikumi_chosa/_icsFiles/afiedfile/2017/02/14/h27torikumi_chosa.pdf)  
別所崇、「学生相談における居場所づくり(2)ーランチアワーの取り組みー」、奈良佐保短期大学研究紀  
要、第 26 号、2018 年  
文部科学省、「『登校拒否(不登校)問題について』ー児童生徒の『心の居場所』づくりを目指してー」、  
1992 年、[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/06042105/001/001.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/06042105/001/001.htm)  
文部科学省、「不登校児童生徒への支援に関する最終報告」、2016 年、[http://www.mext.go.jp/  
component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afiedfile/2016/08/01/1374856\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2016/08/01/1374856_2.pdf)

